

いのちと地域を守る

■ 交流行事通じ地域で防災教育 (仙台・北六番丁小)

児童の生きる力育てる

考える

仙台市青葉区の北六番丁小が、防災教育の一環として地域との交流に力を入れている。「顔の見える関係が災害時に役立つ」との考えから、児童たちが自ら企画運営する交流イベントを通じて、地域との関わりを深め、支え合いの関係づくりを目指している。

(報道部・村上優)

仙台市北六番丁小(青葉区)の防災教育の柱として開かれている「和・話・輪フェスティバル」。10月のフェスに参加した6年生3人に感想を聞いた。

— こんなこと学んだよ —

日頃の関わり大事
佐藤 奏さん(11)

夏休みも取材に行き、低学年にも分かりやすい発表を考えてきました。安全マップで危険箇所を確認するだけではなく、地域の人口日頃から関わらないと災害の時に助け合えません。お互いの顔を知ることで防災に強い街になると感じます。



つながり役立てる
本村 陽香さん(12)

入学したのは東日本大震災の年です。市民センターを初めて訪ね、スポーツやボランティアなどさまざまなサークルを知りました。フェスの実行委員も務めたので、このつながりが災害時に役立つといいなと思いました。



高齢者を助きたい
佐々木詩織さん(12)

街を良くしたいと思って、街を知ることで助け合える人がいることを知り、自分たちも頑張らなければと感じました。思いを伝え合うことが大事ですね。身の安全を守りながら、自力での避難が難しい高齢者や障害者を助けてみたいです。



イベントで非常食の作り方などを学ぶ児童=10月5日、仙台市青葉区の北六番丁小

3回目を迎えた今年のフェスは10月5日にあり、地元の内会や商店街、社会福祉協議会、消防団、体育振興会など、さまざまな関係者が協力して実施した。

花京院地域包括支援センターを調べた友田菜月さん(12)は「少子高齢化や車いすの大型車が分かった。災害が起きたら助けが必要だし」と意欲を語った。玉地有里紗さん(12)は担当した福祉市民センターは10月のイベントと6月の地域合同防災訓練を防災教育の両輪に位置付けている。

北六地区連合町内会会長の畑林義美会長(67)は「受け身の様子がみられがちだった防災訓練で、自分で考えながら参加して欲しい」と話した。

「避難所にならないうちに避難しなさい」ということを知り、「避難した人を受け入れる側の思いが分かった。地域の絆が被災を減らすことにつながる」と話した。

北六番丁小は市教委の防災教育モデル校(12、14年度)である。防災教育の継続性を模索していた学校が、若い世代とどう関わりたいかと望む地域団体の思いが一致して実現した。

伝える

2011.3.11



石巻市のスタンダウ工務店主任佐々木有香子さん(40)は、出産を間近に控える中、東日本大震災の津波に遭った。大きなおなかを抱えて納戸に避難。2日後に救出され、患者が救済する病院で出産した。自宅や実家も被災し、退院後間もなく、新生児と共に東京の親族宅に避難した。

■ 出産間近 おなか抱えて避難 (石巻市)



妊産婦ケアの施設を



震災直後の石巻市内。がれきや泥で道が覆われた。=2011年3月13日、石巻市八幡町

外を見ると、津波に流されて右往左往し、寺の山門が倒れてきました。必死で階段で納戸に上りました。津波は2階まで止まりました。おなかの張りは続き、おなかの張りはまだ出てこなくて、産声も聞こえてきませんでした。初めての出産で、「死なないで」と泣き崩れる声が聞こえます。偶然、妹宅に避難した人の娘さんが助産師でした。

3月11日の震災発生時は妊娠37週の終わりごろでした。午前中、妊婦健診があり、医師から「いつ生まれてもおかしくないよ」と言われたばかり。帰りに市内の吉野町にある妹の嫁ぎ先の寺「多福院」に立ち寄り、寺に隣接する住居2階にいる時、地震が起きました。津波警報を聞き、内陸側にある実家に車で避難しようとしたのですが、道路は渋滞。緊張のせいかおなかが目んぼと痛み、妹宅にとまることになりました。

救助隊が到着したのは13日夕方ごろ。周囲はがれきや泥に覆われて救助車が入れず、担架で1時ほど運ばれました。遺体も、壊れた家や車もそのまま。惨状の中、近くにいた人たちがおなかを見て「頑張らなさい」と声を掛けてくれました。忘れられませんでした。

到着した石巻赤十字病院は患者であふれ、自分も産婦人科外来のロビーで過ごすことになりました。産声も聞こえてきませんでした。「死なないで」と泣き崩れる声が聞こえます。偶然、妹宅に避難した人の娘さんが助産師でした。

17日未明、破水し、陣痛が始まりました。20時間近しい大変なお産でした。九州から応援にきた助産師さん、私も必要だと思っています。

「減災楽士号」を子どもたちに 楽しく学ぶ場を提供

小松 洋吉さん

東北福祉大教授



東日本大震災以降、防災・減災に向けて備えるの重要性が再認識され、地域や学校、職場などで工夫ある活動が行われている。とりわけ減災教育の重要性が明らかになり、その在り方が明らかにされたことも教訓の一つである。そこで、幼少時から生涯を通じて、防災・減災について学ぶ機会を提供することを考える。

「減災楽士号」という、子どもたちに「減災楽士号」を授与する、校、職場などで工夫ある活動が行われている。とりわけ減災教育の重要性が明らかになり、その在り方が明らかにされたことも教訓の一つである。そこで、幼少時から生涯を通じて、防災・減災について学ぶ機会を提供することを考える。

幼い頃、不思議でしよくなかったことがあった。捕まえたタコさんのドジョウを、家の前の空き地に穴を掘り、小川から水を運んで放した。数日後に探したが、1匹も見当たらなかった。しばらくして分かったのだが、ドジョウは土に潜っていたのだ。忘れられない幼い頃の体験である。

「減災楽士号」を子どもたちに提供することで、防災・減災の意識を醸成し、地域が元気になることを目指している。

「減災楽士号」は、東日本大震災以降、防災・減災に向けて備えるの重要性が再認識され、地域や学校、職場などで工夫ある活動が行われている。とりわけ減災教育の重要性が明らかになり、その在り方が明らかにされたことも教訓の一つである。そこで、幼少時から生涯を通じて、防災・減災について学ぶ機会を提供することを考える。

児童と住民の連携深める

角田市枝野小教諭・防災主任 小森 真人さん(49)

学校に近い大森山で2009年4月に大規模な火災が発生したことを受け、住民と一緒に毎年4月、防災訓練を行っています。全校避難訓練のほか、5年生が



今年6月にはPTA主催の防災学習会がありました。児童たちが新聞紙でスリッパを作り、お菓子にお湯をかけた非常食を食べ、楽しみながら学んでいました。

山林火災を知らない子が通学し、東日本大震災後に生まれた子が入学するようになるため、備えへの意識を高める必要があります。住民との連携を大事にしたいと思っています。

アウトドアの技術生かす

日本赤十字秋田短大助教 及川 真一さん(42)

秋田市の日本赤十字秋田短大を拠点に、東日本大震災の経験を学生や住民に伝える防災キャンプを2014年から運営しています。

普段は身近に感じにくい防災を、キャンプと組み合わせることで楽しく学んでもらえるのではないかと企画しました。災害時を想定して、空き缶で炊飯に挑戦したり、ペットボトルと布を使って泥水をろ過したりと、アウトドアの技術から生きる知恵を教えています。

いざというときの対処法を体験から学び、命を守る方法を身に付けてもらうことで、地域の防災力向上につなげたいです。



現場から